

特殊器台のひろがり

安 川 満

【講座の概要】

1. 特殊器台のはじまり

器台はもともと集落で農耕祭祀に使用される土器として弥生中期中葉ごろ出現すると考えられています。弥生後期のおわりになると墳墓専用の祭器として、非常に大型化した、複雑な文様で飾られる器台—特殊器台が現れます。

特殊器台のはじまりには諸説あり、決着を見ていません。多くの研究者が起源的な個体とみる長坂1号墳出土例は特殊器台としては小型で変則的な構成ですが、縦方向の組帯文があり楯築弥生墳丘墓例よりさかのぼるとは考えにくいものです。文様帯4段間帯5段という完成した構成ですが組帯文をもたない楯築墳丘墓例が最初の特殊器台とみられます。

2. 特殊器台のまつりとそのひろがり

特殊器台は非常にキッチリとしたきまりのもとに作られているようです。文様帯4段間帯5段の構成がその一つです。角閃石^{かくせんせき}という鉱物を含む褐色がかった胎土が特徴的で、特別な粘土を使用して作られたと思われます。文様帯には組帯文と呼ばれる水引のような渦文が特徴的です。また使用においても、特殊器台・特殊壺のセットをもつ墳墓、装飾器台・装飾壺をもつ墳墓、特殊壺しかもたない墳墓などの「ランク」があるようです。

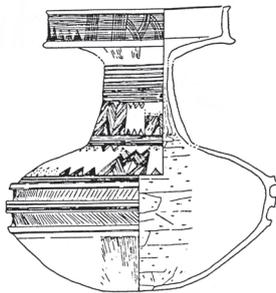
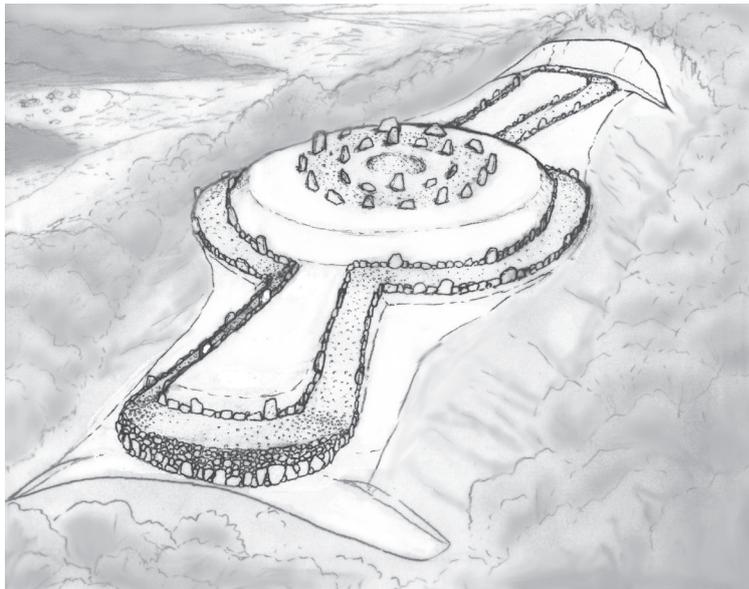
特殊器台の出土遺跡をみると、遠くは大和、河内、摂津、出雲、讃岐に拡がりますが、岡山県と広島県の東部に集中することがわかります。いわゆる「吉備」の領域です。特殊器台を用いる墳墓祭祀を共有するまとまり—吉備の国が初めて現れた瞬間でもあるのです。

3. 初期の埴輪と器台祭祀

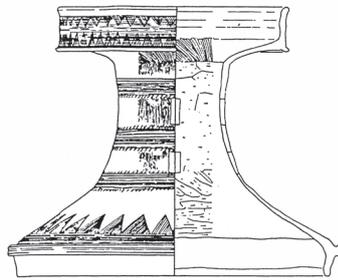
特殊器台はやがて古墳に並べられる埴輪へとつながっていくと考えられています。ほとんどの地域では埴輪がもともと器台であることは忘れ去られていきますが、吉備では都月型埴輪の段階には特殊器台以来の器種構成を保っているようです。また、伊予型特殊器台、讃岐型特殊器台などと呼ばれるものがあります。その地域で古式の古墳から出土するもので、弥生時代にさかのぼるものではありません。それらの地域は弥生時代以来器台を用いてきた地域ですが、特殊器台は用いていない地域です。これらの地域では埴輪が器台であることを認識し、埴輪祭祀が伝わってきて初めて独自の墳墓用の器台形土器を生み出すようです。

【参考文献】

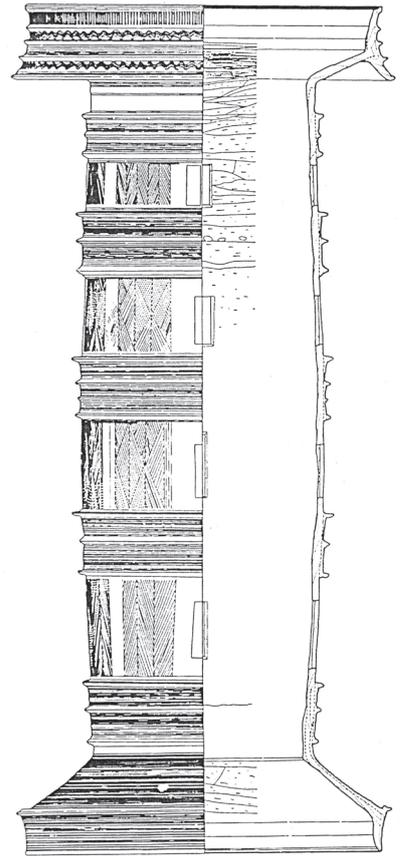
近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店



特殊壺



装飾器台



特殊器台

図1 楯築弥生墳丘墓（想像図）と特殊器台
近藤義郎ほか1992『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会ほか

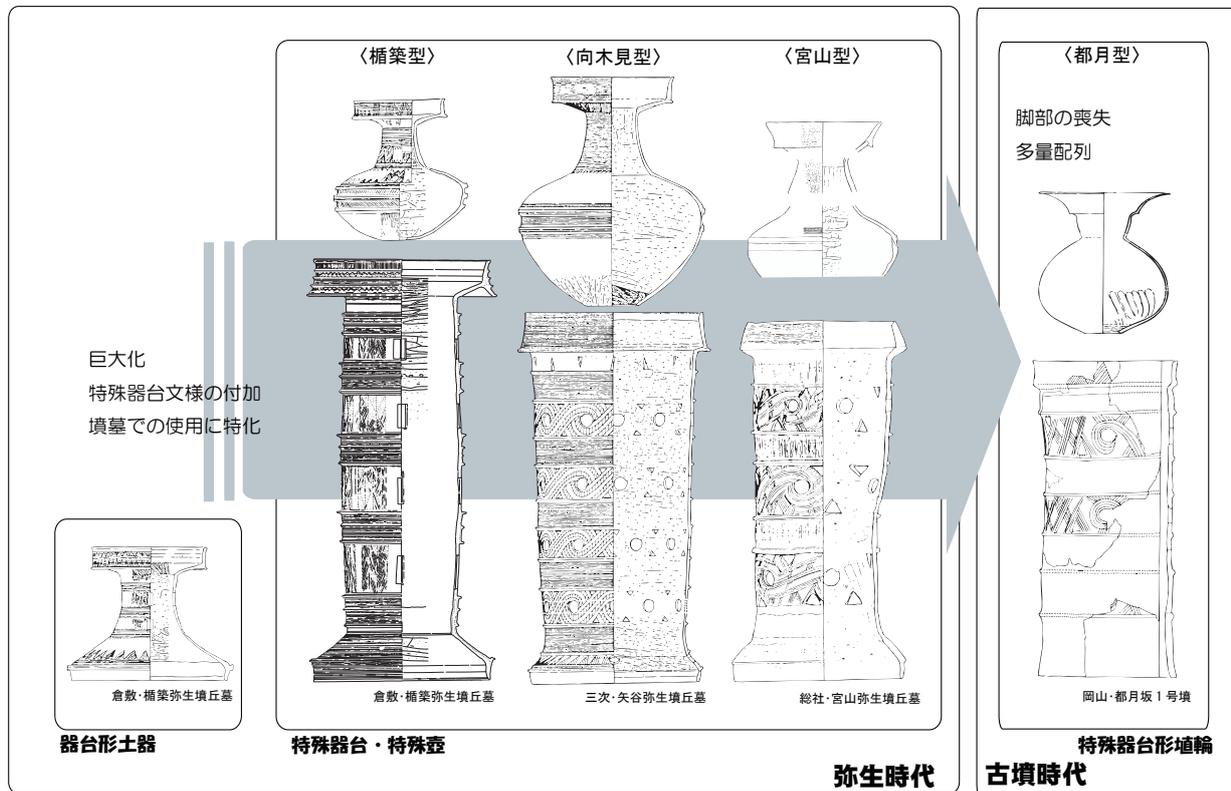


図2 特殊器台の変遷

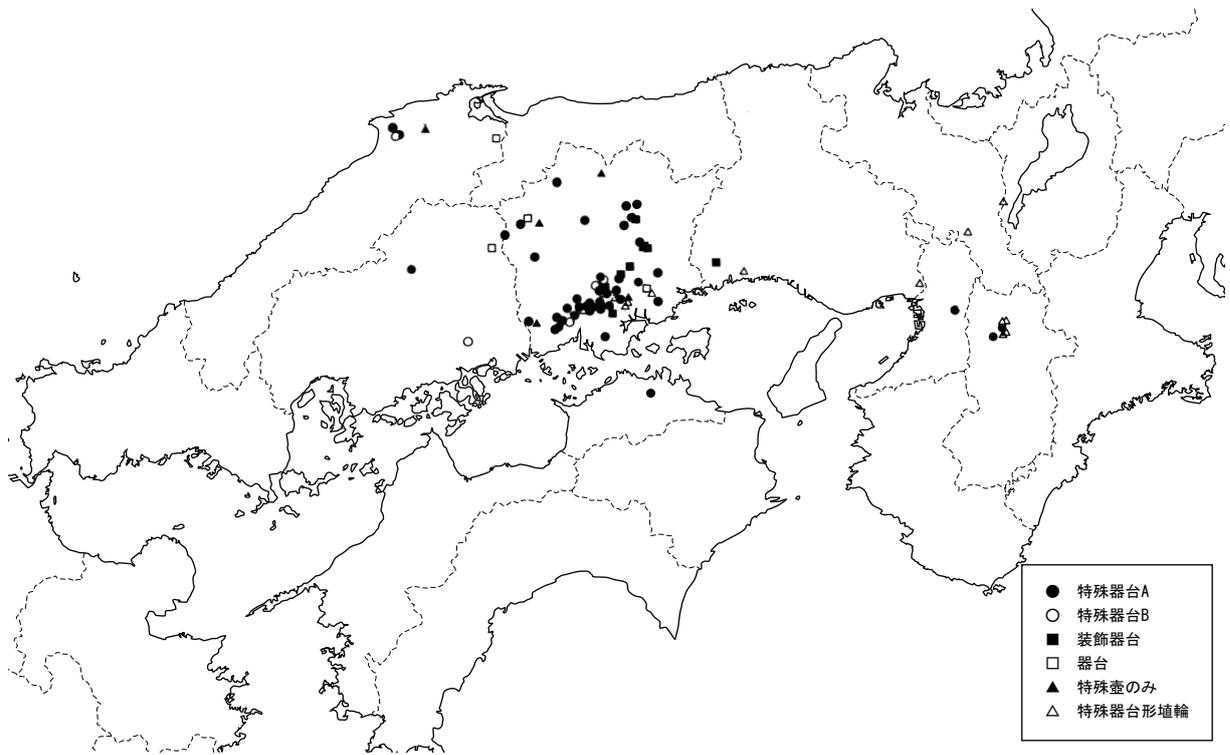


図3 特殊器台の分布

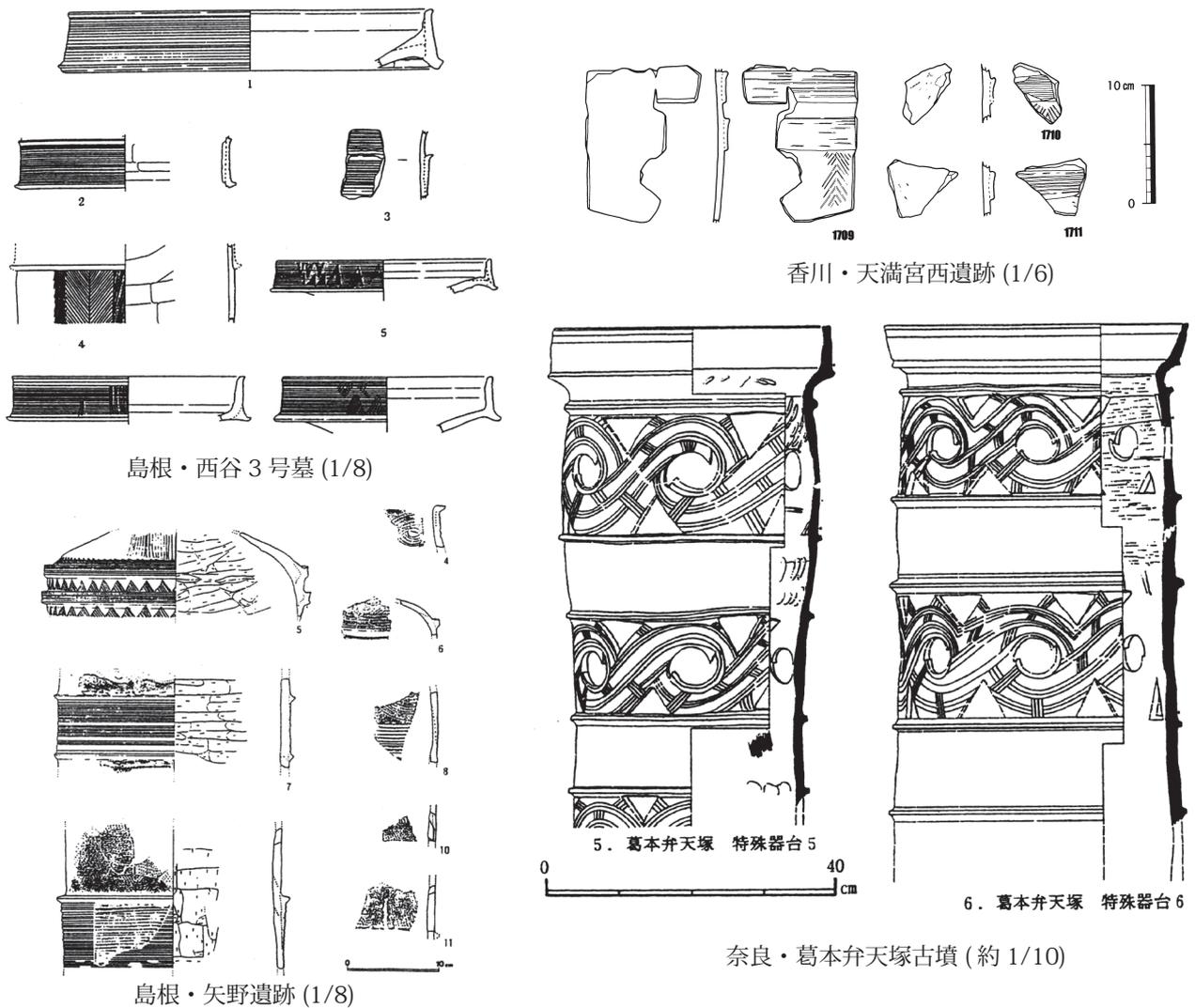
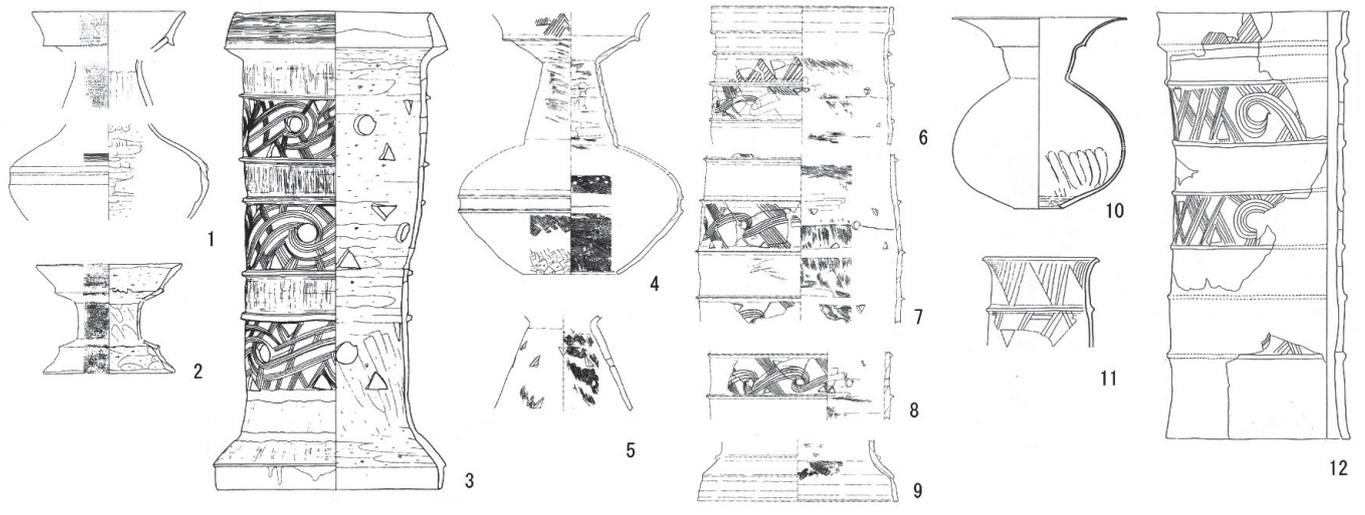


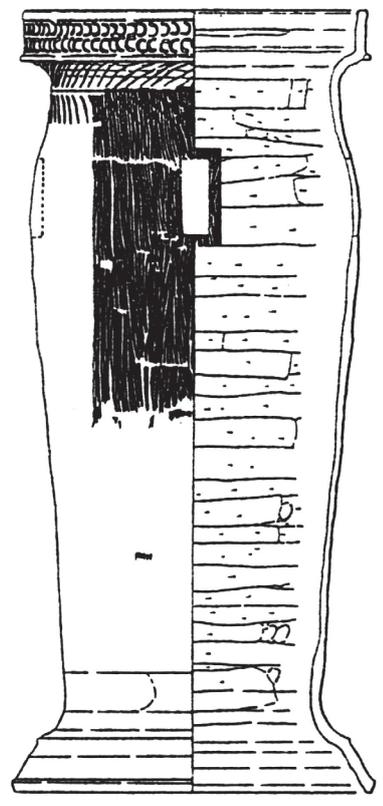
図4 各地の特殊器台



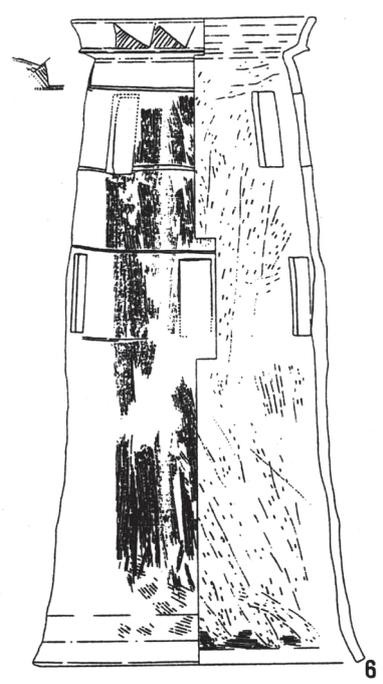
1～3 宮山弥生墳丘墓（注24文献）
 4～9 矢藤治山弥生墳丘墓（注25文献）
 10～12 都月坂1号墳（注1文献）

図5 宮山弥生墳丘墓・矢藤治山弥生墳丘墓の土器群と都月坂1号墳の埴輪

【山陰型】

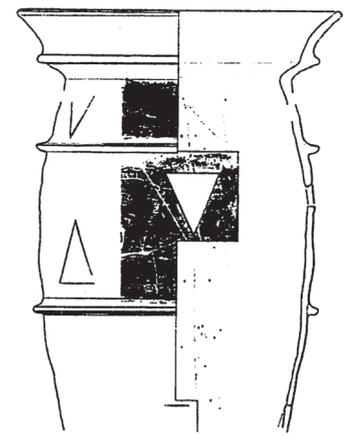


島根・塩津山1号墳



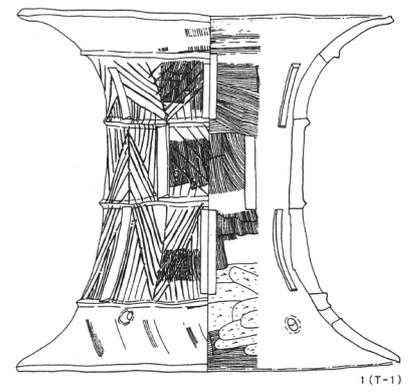
島根・神原神社古墳

【讃岐型】



香川・船岡山1号墳

【伊予型】



愛媛・妙見山1号墳

図6 中四国の「特殊器台」のようなもの (S=1/8)